

[100] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10166>

出版情報：語文研究. 100/101, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《総目次》

創刊号（昭和二十六年三月）

藤村とシエイクスピア

興福寺本靈異記訓釈考

万葉植物の様相

平仲説話の展開と平仲物語

浄瑠璃の限界

形容詞を構成する二の接尾語について

去來の一句の解釈

伝中御門宣秀筆金葉和歌集

書評

笹淵友一著「北村透谷」

高木市之助著「湖畔」を読む

第二号（昭和三十年五月）

人麻呂長歌の修辭研究

・特に序詞の使用について

芭蕉と自然・一つの手がかりをもとに

九州野坡門の研究・その形成の時代

「天霧」の訓について

現代語「からに」について

徒然草第五十六段末尾の解釈

・ざえある人はその事

芭蕉連句評釈（一）

・「うぐひす」の巻（上）

第三号（昭和三十年十一月）

倭建の命は天皇か・古事記の用字法に即して

落窪物語の笑ひ

仏教的と非仏教的

・今日平家物語をどう読むべきかの問題に關連して

近松の姦通浄瑠璃

あゆひ抄の「立居」と「本」

徳富蘆花と社会主義

芭蕉連句評釈（二）

・「うぐひす」の巻（下）

第四・五号（開講三十周年記念特輯・昭和三十一年十月）

国語の母音同化

あの頃

小宮氏本新古今集その他

女にて見奉らまほし

五七調の成立について

九州西南部方言における長母音について

春日 和男

杉浦 正一郎

福田 良輔
大原 一輝

井手 恒雄
横山 正

佐田 智明
寺園 司

杉浦 正一郎

春日 政治

高木 市之助

小島 吉雄

笹淵 友一

瀬古 友一

上村 孝二

「浜風爾・紐吹返」考

成實堂文庫本・遊仙窟について

「あはれ」の再検討・中世歌僧の論を兼ねて

世話浄瑠璃表現と芸風

「現代かなずかい」私案

読本作家の構成能力の問題

・桜姫全伝曙草紙をよすがとして山東京伝の場合

芭蕉と寿貞・次郎兵衛

万葉集における語・告・謂・言の訓

・表記意識と用字法との関連において

「邪宗門」の南蛮詩と空太郎

元永本古今和歌集の書写に関する一問題

志賀白水郎歌十首の歌謡性

・憶良の単独創作説を疑ふ

九州大学国文学会関係雑誌における会員の論文一覧

第六・七号（故杉浦正一郎教授追悼号・昭和三十三年十二月）

故杉浦教授追悼号によせて

俳人諸九尼の生涯・なみ女の頃

『おくのほそ道』板行以前の反響

・影響史の序説

伊勢物語の章段排列に関する一考察

・助動詞の用法から

黒岩 駒 男

平井 秀 文

井手 恒 雄

横山 正

矢野 文 博

目加田 さくを

大内 初 夫

鶴 久

重松 泰 雄

春日 和 男

福 田 良 輔

福 田 良 輔

福 田 良 輔

福 田 良 輔

福 田 良 輔

福 田 良 輔

福 田 良 輔

大内 初 夫

福 田 良 輔

福 田 良 輔

白石 悌 三

遠 藤 康 子

中世歌学書に見える言語意識の性格

上代における母音音節の脱落について

二葉亭四迷の現実認識

狭衣の道心

心敬と自然美

・彼の反仏教的発想への理解の試み

万葉集における有情とその存在の表現

・「ある」「をる」を中心として

万葉集に於ける虚字の効用

正安本「義孝集」翻刻と校異

第八号（昭和三十四年一月）

浄瑠璃「蝉麿呂」と「蝉丸」

万葉集における対句の場合の訓について

上代における工列乙類の性格

書評

野村望東尼全集を読む

笹淵友一著『浪漫主義文学の誕生』

杉浦正一郎著『芭蕉研究』

紹介

目加田さくを編註『平仲物語』冷泉為相筆

細川文庫目録

佐田 智 明

森山 昭 二 郎

立川 一 輝

大原 一 輝

井手 恒 雄

瀬良 益 夫

瀬古 益 夫

今井 源 衛

今井 源 衛

今井 源 衛

横山 正

横山 正

鶴山 正

鶴山 正

森山 隆

春日 政 治

春日 政 治

重松 泰 雄

重松 泰 雄

大内 初 夫

第九号 (昭和三十四年九月)

宝曆和の大阪騒壇・列仙伝の人々・
旅人の表現・特にその孤独をめぐって・
風土と用字・上代における「湖」について・
いわゆる説話文学の文学的価値
蕉風俳諧美の理念についての一考察

・さび、しをり、細みについて・
露伴と鷗外・歡画談と寒山拾得・
漱石における自然
語彙「肥前から薩摩へ」

第十号 (春日政治博士八十賀記念訓点特集号・昭和三十五年五月)

高野山西南院蔵「和泉往来」について
平安朝初期の訓点語に用ゐられたスラとタニ
トキとトキニの訓点
漢文訓読語に於ける係助詞に就いて
遊仙窟「菅家本」考
カクノゴトシといふ熟語の訓読性

・訓点語と今昔物語集の用例二三・

第十一号 (昭和三十五年九月)

源氏物語奥入の成立について・待井説に賛成する・
今井源衛
花山院の「花見る人」の歌

・日本文芸史における無常観の克服・補遺・井手恒雄

沾徳年譜追考 京極高住の俳諧について

人麻呂歌集訓詁二題
日本霊異記の「所」字について
上代における力行音の清濁表記について
書評
井手 恒雄氏著

第十二号 (昭和三十六年四月)

萬葉集に於ける雑歌の表現
柘枝伝考
『辨篇突集』について・『旅寝論』の一異本・
「千曲川のスケッチ」文体試論
小林秀雄とベルグソン

・「近代絵画」を中心として・
近世初期儒学者の言語観
・テニヲハ観との関連において・
紹介
大内・飯野・阿部氏編「湖白庵諸九尼全集」

第十三号 (昭和三十六年十月)

物語と小説についての覚え書
とりかへばや物語の世界
平家物語覚一本とその伝承

海音関係丸本の奥書とその意義

横山 正

第十六号(故春日政治博士追悼号・昭和三十八年六月)

万葉集の枕詞「霰零」「丸雪降」はアラレフリかアラレフルか

福田 良輔

天平十年駿河国正税帳の防人数と東国方言

福田 良輔

紹介

中村幸彦著『近世作家研究』

白石 悌三

万葉集卷十五の用字をめぐって

瀬古 隆

中村幸彦著『近世小説史の研究』

田中道雄

変字法と清濁表記との交渉・万葉集における、

森山 隆

第十四号(昭和三十七年五月)

連濁・上代語における、

森山 隆

天正本浄土三部経音義の和訓

佐田 智明

松平文庫本蜻蛉日記について

西丸 妙子

稿本あゆひ抄における半語の位置

春日 和男

芭蕉の発句推敲覚書

石川 八朗

「碓氷の坂を越えしだに」補説

笹淵 友一

翻刻『西郭 俗湖月抄 草案』

田中道雄

父の思い出によせて、

穴山 孝道

第十五号(昭和三十七年十二月)

浄瑠璃絵尽の効用

中村 幸彦

藤原道長と法成寺とについて、

今井 源衛

続長恨歌訓読考異

矢野 文博

山鹿素行手沢本「大和物語抄について」

井手 恒雄

幕末期佐賀地方の助詞

中村 幸彦

遁世思想・古文芸との関連において、

中村 幸彦

・「滑稽洒落一寸見た夢物語」を中心にして、

初期名古屋俳壇の一資料

横山 正

翻刻「世中に」随筆

篠崎 久躬

土佐少椽の曲節・その性格についての一試論、

重松 泰雄

紹介

石川 八朗

美妙斎の句読法・四迷への影響を中心に、

徳満 澄雄

今井源衛著「源氏物語の研究」

徳満 澄雄

後撰集の構成意識に関する一考察

広川 清也

井手恒雄著「平家物語論」

笠 栄治

源氏物語における「色好み」について

金原 理

肥前島原松平文庫本「千載佳句」について

徳満 澄雄

肥前島原松平文庫本「千載佳句」について

春山 要子

広本方丈記における五大災厄の叙述について

中村 幸彦

「血かたびら」の説・松田修氏の論に即して、

中村 幸彦

紹介

福田良輔著『古代語文ノト』

横山 正著『浄瑠璃操芝居の研究』

鶴 橋 英 哲 久

其角晩年の生活について

浄瑠璃絵尽考

紹介
目加田さくを著『物語作家圏の研究』

石川 八朗
橋 英 哲
今 井 源 衛

第十八号(福田良輔教授還暦記念特集号・昭和三十九年八月)

上代における^oと^o交替の周辺

已然形に承接して反語を表はす「かも」

古事記における直叙様式

之・者の用字について

変体漢文の訓読上の一疑点

新撰字鏡「本草部」の記載形式とその構成

「見渡せば花も紅葉も」(新古今秋上・定家)の歌をめぐって

森 山 隆
鶴 久
原 口 裕
原 栄 一
福 田 益 和
瀬 古 確

「ア二八」と「詞」との関係

・手爾葉大概抄之抄をめぐって

キリシタン口語資料に於ける否定を伴ふ副詞

「なる」の意味変化

・文法上許容二関スル事項一六の場合

近世語資料としての詞葉新雅

紹介
福田良輔著『奈良時代東国方言の研究』

第十九号(昭和四十年二月)

薩摩新田神社所蔵の鎌倉末期連歌懷紙

笠崎宮連歌(上)・宗因自筆百韻「手向には」

「絶景にむかふ時はうばはれて不^レ叶」の意味

大 内 初 夫
棚 町 知 弥
白 石 悌 三

第二十号(昭和四十年六月)

為信集と源氏物語

古事記巻初の訓み、「天地初発」と「天地初起」

嶋田忠臣伝考

三木露風とカトリシズム

紹介

井手恒雄著『中世日本の思想と文芸』

今 井 源 衛
原 口 裕
金 原 理
寺 園 司
白 石 悌 三

第二十一号(昭和四十一年二月)

古今六帖と千載佳句

和泉式部「くらきより」の歌の詠作年時

蝶夢の俳壇登場をめぐる諸問題(上)

露伴文学における華嚴思想について

紹介

福田良輔著『奈良時代東国方言の研究』

第二十二号(昭和四十一年十月)

副詞から見た日本霊異記

中古語「まかる」の一考察

清 田 伸 一
龍 頭 昌 子
田 中 道 雄
瀬 里 広 明
森 山 隆
原 栄 一
中 島 京 子

古文書にみた中世末期越後地方の音韻
文の構造

迫野 虔徳
矢野 文博

第二十五号 (昭和四十三年三月)

「新資料紹介」源氏のゆふだすき」と源氏三十六首之哥

資料紹介

絵入浄瑠璃本「日本九ほんのじやつ」

横山 正

平安時代漢詩人の規範意識

・本朝文粹所蔵の大江匡衡と紀育名の省試論争をめぐって

第二十三号 (昭和四十二年二月)

白菊奇談と石点頭

中村 幸彦

交野少将物語についての一試論

「蜻蛉日記」上巻の成立に関する私論

萬葉集の「生」字について

桜島忠信落書について

徳満 澄雄
後藤 昭雄

福田良輔編「九州の萬葉」

宮沢賢治の「心象スケッチ」について

境 忠一

「柳澤騒動」實録の轉化

・直観像字説と幻視の文学

小林秀雄ノ・ト・その歴史思想を中心に

山田 輝彦

第二十六号 (昭和四十三年十月)

新刊紹介

笠栄治著「陸奥話記校本とその研究」

井手 恒雄

芭蕉俳文における「鼓舞」について

式亭三馬の言語描写についての一考察

近松時代に於ける操人形の所作

馬内侍集伝本考

仮名文における拗音仮名表記の成立

紹介

瀬古確著「萬葉集に於ける表現の研究」

春日和男著「存在詞に関する研究・ラ変活用語の展開」

紹介

「昔」と「今は昔」・「今昔考」補説

春日 和男

宮本武蔵の「独行道」

藤井 茂利

仮名文における拗音仮名表記の成立

「六の宮の姫君」の自立性

紫藤 誠也

瀬古確著「萬葉集に於ける表現の研究」

中村幸彦著「戲作論」

海老井 英次

今井源衛著「紫式部」

中山 右尚
西丸 妙子

境忠一著「評伝宮沢賢治」

原口 裕
海老井 英次

今井 源衛

金原 理

後藤 昭雄

古賀 典子

吉川 進

橘 英哲

中村 幸彦

井上 敏幸

五所 美子

遠藤 和恵

福井 迪子

迫野 虔徳

鶴 久

第二十七号(福田良輔教授退官記念号・昭和四十四年六月)

福田良輔教授略歴

福田教授の思ひ出

短歌表現論

和漢朗詠集と宮本武蔵

芭蕉における死の意味

塗籠本伊勢物語に関する一考察

・定家本との対校をとおして・

『句兄弟』の方法

定家の仮名遣いの成立について

「詩」と「阿呆」と

・芥川龍介「或阿呆の一生」論一・

福田先生の想い出

福田先生と出来のわるい学生

福田良輔教授と共に

第二十八号(昭和四十五年五月)

「かがやく日の宮」 政

嵯峨天皇と弘仁期詩壇

『西鶴名残の友』挿絵考

西鶴「大笑ひ」の手法

蝶夢の俳壇登場をめぐる諸問題(中)

紹介

今井源衛著『花山院の生涯』

大内初夫著

『芭蕉と蕉門の研究』芭蕉・酒堂・野坡 考証と新見

小島 吉雄

山崎 孝子

紫藤 誠也

佐々木 雄爾

山口 康子

石川 八朗

迫野 虔徳

海老井 英次

武末 次男

原 栄一

春日 和男

伊藤 博

後藤 昭雄

若木 太一

井上 敏幸

田中 道雄

後藤 昭雄

後藤 昭雄

後藤 昭雄

後藤 昭雄

後藤 昭雄

第二十九号(昭和四十五年十一月)

伊勢本節用集の一系譜

・玉里文庫本と龍門文庫一本・

万葉集巻十四における清濁表記

日本書紀私記甲本における傍訓の性格について

格助詞「にて」の形成と言語における交替現象

馬内侍集における編纂意識の特徴についての一考察

紹介

井手恒雄著『徒然草通説批判』

蝶夢の俳壇登場をめぐる諸問題(下ノ一)

藤原兼輔伝考(二)

狭衣物語の神

翻刻 西国追善集

紹介

今井源衛著『王朝文学の研究』

第三十一・三十二号(中村幸彦先生送別特輯・昭和四十六年十月)

思い出すまに

福田良輔

春日 和男

鶴 益久

福田 益和

添田 建治郎

福井 迪子

白眼三公に對ふ・賀陽豊年小伝・

漢文訓読と終助詞「かし」の問題

齋宮女御集伝本系統に関する考察

菅公と源氏物語

大江匡衡の詩文

日本法華驗記から今昔物語集へ

・副詞の踏襲・換言・省略・付加・

今昔物語集「目錄」考・その表題形式について・

解釈文法の立場より

・「もぞ」・「もこそ」についての私見・

「後三年合戦絵詞」とその伝承

力行イ音便の形態的定着

聚分韻略の版本について

鈴木正三の思想と教化・島原・天草の乱その後・

本朝二十不孝の方法

・二十四考『説話を手懸に・

鬼實の俳論

近松時代物浄瑠璃の道行

活用語に接続する「ラシイ」

・明治におけるその定着の状態・

「偷盗」への一視角

二つの『愛と死の谷間』

送別記念号によせて

中村幸彦先生略歴

第三十三号（昭和四十七年五月）

図書寮本類聚名義抄の和音注の性格

藤原兼輔伝考（二）

蝶夢の俳壇登場をめぐる諸問題（下ノ二）

樋口一葉と宗教

紹介

森山隆著『上代国語音韻の研究』

瀬里廣明著『文明批評家としての露伴』

境忠一著『詩と故郷』

第三十四号（昭和四十七年十二月）

見立絵本の系譜・「百化鳥」の余波・

大江嘉言考・詠歌活動とその交友・

貝原益軒の紀行文

・その製作状況と個々の作品について・

『佳人』試論

アクセント資料としての謡曲譜本の意義

第三十五号（昭和四十八年八月）

古本住吉物語と狭衣物語

・飛鳥井の物語との関係・

松平文庫蔵『姫宮私言』・翻刻と解題・

楊守敬旧蔵本将門記仮名点の性格

・その字音語表記をめくつて・

田尻英三

工藤重矩

田中道雄

寺園司

山口裕

山田輝彦

狩野啓子

中野三敏

福井迪子

板坂耀子

狩野啓子

添田建治郎

井上敏幸

石井大

橘英哲

原口裕

海老井英次

江頭太助

白石悌三

森下純昭

渡辺真理子

安田博子

「伊京集」の言語

天理本狂言六義の名告における「じゃ」

・異形の名告とその位置

紹介

笠栄治編『平家物語総索引』

奥村三雄解題・平曲正節・節付本平家物語

今井源衛監修 福井迪子・工藤重矩・田尻英三編

校本馬内侍集と総索引

境忠一著『詩と土着』

第三十六号 (昭和四十九年二月)

芭蕉の杜甫受容小論

・「杜子がしゃれ」を手がかりに

蕉門俳諧師の方法・支考の場合

藤原兼輔伝考 (三)

真名書説話の表記意識について

・私聚百因縁集和朝之篇を題材として

「破戒」論 種々なる生活状態

紹介

井手恒雄著『中世の文芸・非文芸』

第三十七号 (故福田良輔博士追悼号・昭和四十九年八月)

献辞

故福田良輔博士略歴

柏原卓

田籠博

井手恒雄

添田建治郎

西丸妙子

瓜生清

石川八朗

石井大

工藤重矩

南里みち子

瓜生清

板坂耀子

板坂耀子

故福田良輔博士研究著作目録

術なき恋、「言はむ術せむ術知らに」

上代日本文献に見える「魚韻」の漢字

・朝鮮漢字音との関連について

平安朝文学における僧侶の恋

今昔物語集の同一動詞反復形式管見

・「こ」を介する形式について

定家の「仮名もし遣」

平家物語副詞覚書 その二

「古今著聞集」小考・名義をめぐって

終止形承接のナリについて

・その中世・近世における把握

行脚俳諧師石蘭と『梅の会集』

仕形咄考

・一つの覚え書き

・歴史への開眼

・一つの外における

・一つの覚え書き

・一つの覚え書き

第三十八号 (昭和五十年一月)

紫式部集所載歌の詠作年代について

名所図会類の風景描写

・文政末・天保初年を中心に

瀬古 確

藤井茂利

今井源衛

山口康子

山野康子

迫野康子

原栄一

福田益和

佐田智明

大内初夫

中村幸彦

重松泰雄

春日和男

白石梯三

白石梯三

中島あや子

板坂耀子

白石良夫

筑前方言のアクセントについて

紹介

奥村三雄著『聚分韻略の研究』

寺園司著『文学者と宗教』

稲川 順一

第四十一号（昭和五十一年三月）

十訓抄の文章について

近世女流紀行文学の性格

近世後期上方語資料としての上方板洒落本類

伊東静雄の昭和八年中期の詩

紹介

目加田さくを著『源氏物語論』

中村幸彦著『近世文芸思潮』

境忠一著『近代詩と反近代』

榎田 良照

板坂 耀子

矢野 正幸

赤塚 正幸

赤塚 正幸

工藤 重矩

中野 三敏

赤塚 正幸

第三十九・四十号（春日和男教授還暦記念特輯号・昭和五十年六月）

平家物語副詞覚書・その二・

「二」を介する同一動詞反復形式の史的考察

・今昔物語集まで・

訛形の定着・ブラジル日系人の言語調査から・

古今著聞集の表現に関する一考察

・今昔物語集・宇治拾遺物語との比較を通して・

「仮名遣」の問題

トカラ列島（中之島・平島）のアクセントと語彙

福岡県北部地方の方言アクセント

・若松半島の方言アクセントの実態と共通語化・

円心の抄物について・洞門抄物の周辺・

語源研究法に関する一考察

・アクセントから語源研究へ・

平曲譜本と付属語のアクセント

竹河巻は紫式部原作であろう（下）

山口 康子

原 栄一

原 栄一

福田 益和

迫野 虔徳

田尻 英三

添田 建治郎

田籠 博

柏原 卓

奥村 三雄

今井 源衛

第四十二号（昭和五十一年十二月）

河内屋与兵衛論

「新撰字鏡」に於ける天治本と享和本の形式上の相違点について

秋月郷土館「黒田文庫」報告

今井 源衛・棚町 知弥・中野 三敏

（付）長興・立圃俳諧資料

翻刻『みやこいじ』

南里 みち子

春日和男著『説話の語文 古代説話文の研究』

春日和男・原栄一共編『説話の語文 日本霊異記漢字索引』

八木毅著『日本霊異記の研究』

迫野 虔徳

迫野 虔徳

福田 益和

第四十三号（昭和五十二年六月）

紫式部の越前の旅と須磨巻

中島 あや子

二条東院構想の変遷

福岡県諸方言アクセント
戯作類における唐音表記

稲川 順一
矢野 準

中島廣足の歌風

田坂 憲二

・自文政五年至同七年詠草 について

白石 良夫

・観智院本三宝絵詞における仮名併用

榎田 良照

国語史資料としての近松世話物浄瑠璃

野口 義廣

・濁点・胡麻点等の表記について

高瀬 正一

故田村専一郎先生旧蔵「支子文庫」報告 九州大学国語国文学会有志

立川 昭二郎

・観智院本類聚名義抄 について

野口 義廣

・濁点・胡麻点等の表記について

野口 義廣

・観智院本類聚名義抄 について

野口 義廣

第四十四・四十五号

（春日和男教授退官記念号・昭和五十三年六月）

春日和男教授略歴

春日 和男

春日和男教授主要著作目録

春日 和男

「峯文十遠仁」考

春日 和男

「笈の小文」の問題点一、二

春日 和男

・伊賀餞別 と大仏再興周辺

井上 敏幸

・藤原齋信考・文芸面から

福井 迪子

・平兼盛の系譜・王氏・平氏の説をめぐって

工藤 重矩

・戦前の石川淳における叙情否定のモティフをめぐって

狩野 啓子

・「評論森鷗外」を中心に

狩野 啓子

第四十六号（昭和五十三年十二月）

初期義大夫節における詞の意義

横山 正

安吾文学と矢田津世子

横山 正

・二人の出会いを中心として

横山 正

『都氏文集』の諸本について

横山 正

大蔵流狂言の待遇表現について・述部の体系・
形態アクセント論の一考察

坂口 順至

・複合語アクセントと語構成・連濁をめぐって

坂口 順至

・紹介

木部 暢子

・中野三敏著「近世新崎人伝」

白石 良夫

末摘花に投影された作者紫式部

中島 あや子

福岡県諸方言アクセント
戯作類における唐音表記

稲川 順一
矢野 準

片仮名の用法

榎田 良照

・観智院本三宝絵詞における仮名併用

榎田 良照

和訓よりみた「新撰字鏡」と「観智院本類聚名義抄」について

高瀬 正一

・清濁資料としての近松世話物浄瑠璃

野口 義廣

・呉音声調の国語化と訓点資料・儀軌類を中心に

崎村 弘文

・万葉集付属語の用字にあらわれた語意識について

秋吉 望

・春日先生との二十余年

今井 源衛

第四十七号（昭和五十四年六月）

『伊勢物語』 初段を考ふる（上）

宣長判寛政元年歌合（全集未収録）について 白石 良夫

『とりかへばや物語』における『源氏物語』 撰取 辛島 正雄

・ 四の君密通事件の場合、

紹介

七人編『近世文芸資料と考証』

境 忠一著『宮沢賢治の愛』 花田 俊典

第四十八号（昭和五十四年十二月）

『都氏文集』の諸本について 追考 中條 順子

延慶本『平家物語』、『源平盛衰記』、寛一本『平家物語』における 橋口 晋作

泰山府君 津田 修造

木下長嘯子伝雑考 その（一） 吉田 達

『伊勢物語』 初段を考ふる（中） 第一部 歴史的視野よりの接近、

「春日齋宮」 酒人内親王考 陳 子博

台湾閩南語の研究・日本漢字音研究への展開、

紹介 目加田さくを著『大鏡論漢文芸作家圈における政治批判の系譜』 田坂 憲二

第四十九号（昭和五十五年六月）

夏目漱石の学習院就職運動

・ 新資料・立花銚三郎あて漱石書簡の紹介、 原 武 哲

第五十号（昭和五十五年十二月）

玉鬘十帖の結末について・若菜巻への一視点、
近世末期方言資料としての『はまおぎ』

・ 現代方言よりする文献批判、

紹介

今井源衛著『紫林照径・源氏物語の新研究』

第五十一号（昭和五十六年六月）

「防人歌」の筆録・その言語資料としての性格、

二巻本「宝物集」における細川文庫本の位置について

言語資料としての歌舞伎脚本・敬語辞を中心に、

木下長嘯子伝雑考 その（二）

秋成の「私」の説について

紹介

渥美かをる 奥村三雄編著『平家正節の研究』

徳満澄雄著『我身にたどる姫君物語全註解』

小澤正明著『川端康成文芸の世界』

第五十二号（昭和五十六年六月）

支子文庫本『拾玉集』について

原音声調から観た日本書紀音仮名表記試論

定家本『土左日記』の表記について

紹介

今井源衛著『祐倫光源氏一部詞』

中野三敏著『戯作研究』

田坂 憲二

崎村 弘文

森下 純昭

迫野 虔徳

田中 潤子

山 県 浩

津田 修造

飯 倉 洋一

添田 建治郎

辛 島 正雄

狩 野 啓子

西 丸 妙子

高 山 倫明

望 月 正道

古 賀 典子

中 山 右尚

第五十二・五十三号

(今井源衛教授退官記念号・昭和五十七年六月)

今井源衛教授略歴

今井源衛教授主要著作目録

「我身にたどる姫君」のユ・モア

有島武郎と『復活』劇

・或る女への道程(一)

『英和俗語辞典』の補訂をめぐって

『小説神髓』論・小説の裨益について

風雅論の定位

『平家物語』長門本の一画

・住吉明神関係記事をめぐって

朝鮮通信使と石川丈山・「日東の李白」考

玉葛の跡・本居宣長「菅笠日記」に見る一古典研究者像

秋が見島の方言アクセント卑見

昭和十八年の石田淳の文芸時評について

万葉集巻十四に於ける平安時代の性格

・用字と上代特殊仮名遣をめぐって

国語資料としてみた高瀬学山の明律注釈書について

「塵埃」論・塵勞生活と「予」の形象をめぐって

『真幸問宣長答 本居問答』の成立について

健康な肉体 の発見・坂口安吾「女体」から「恋をしに行く」へ

活用型の変化から見た上方絵入狂言本

・一段活用の一段化の場合

万象亭の戯作

「自然」の意味・秋成の理想と現実

第五十四号(昭和五十七年十一月)

『おくのほそ道』の構想臆断・高館

・興津弥五右衛門の遺書論

『月に吠える』形成過程の考察

・罪人から病者へ

中原中也「含羞」論

・在りし日の隔絶性について

紹介

金原 理著『平安朝漢詩文の研究』

後藤昭雄著『平安朝漢文学論考』

第五十五号(昭和五十八年六月)

『狭衣物語』の「宮の中将」をめぐって

「めでたさ」の季節・天明狂歌の本質

「老狂人」から「羅生門」まで

・「羅生門」前史における視点の獲得と関連して

白 石 良 夫

工 藤 博 子

柏 原 卓

瓜 生 清

狩 野 啓 子

板 坂 耀 子

添 田 建 治 郎

花 田 俊 典

山 泉 浩

園 田 豊

飯 倉 洋 一

紫 藤 誠 也

宮 崎 隆 広

國 生 雅 子

中 原 豊

工 藤 重 矩

工 藤 重 矩

後 藤 康 文

久 保 田 啓 一

松 本 常 彦

文終止形式から見た荘子抄の成立

唐通事の語学書・「訳詞長短話」管見・

紹介

大内初夫・尾形仿・櫻井武次郎・白石悌三・中西啓・若木太一編
『去来先生全集』
石川八朗

古田雅憲
大橋百合子

大内初夫著『近世九州俳壇史の研究』

田中道雄

第五十八号（昭和五十九年十二月）

太宰治におけるロシア文学の問題

・ブ・シキンとチェ・ホフの持つ意味・山崎正純
大坂本屋仲間雑致 その一
・行司本役及び加役など・

日本漢音資料としての台湾閩南語の研究

安永美恵
張瓊玲

特殊拍とアクセント・北九州市小倉方言の場合・

木部暢子

紹介

笠栄治著『平治物語研究校本編』

橋口晋作

原武哲著『夏目漱石と菅虎雄布衣禅情を楽しむ心友』

松本常彦

山田輝彦著『夏目漱石の文学』

海老井英次

第五十七号（昭和五十九年六月）

古文書語彙の性格・副詞を中心として・

都賀庭鐘 読本の漢語

京都時代のダダイズム

・中原中也「ダダ」詩の解読・

天愚孔平伝 一・資料紹介・

資料紹介

『追善二腹帯八百屋の段』

紹介

奥村三雄著『平曲譜本の研究』

添田建治郎

第五十九号（昭和六十年六月）

謡曲譜本の上胡麻について

方言資料として見た長崎通事の語学書

・魏龍山「訳詞長短話」及び岡島冠山の諸著作など・

嘉村磯多論・「七月二十二日の夜」の評価をめぐって・

大橋百合子

「芋粥」論

『曾根崎心中十三回忌』の絵巻について

横山孝文

紹介

今井源衛・春秋会著『我身にたどる姫君』

後藤康文

東秀吉著『球磨弁助詞と助動詞と』、『球磨弁音韻と文法』、『球磨弁語彙と語法』

大内初夫著『俳林逍遙・芭蕉・去来・諸九尼』

石井大

第六十号（昭和六十年十二月）

『伊勢物語』異見

今西祐一郎

嶋田忠臣論断章

後藤昭雄

遠山景晋『未曾有記』について

・蝦夷紀行がもたらしたもの

板坂耀子

高野蘭亭伝攷（上）

高橋昌彦

『和独対訳辞林』について

坂本浩一

『曾根崎心中十三回忌』の絵巻について・補正

横山正

紹介

今井源衛著『在原業平』

吉田達

田坂順子編『扶桑集・校本と索引』

金原理

鈴木重三・木村八重子・中野三敏・肥田皓三編『近世子どもの絵本集』

園田豊

本集江戸編・上方編

第六十一号（昭和六十一年六月）

古今集一四八の解釈・補考

・啼いて血を吐く社鶉のことなど

工藤重矩

『浅茅が露』作者考・序章

・藤原為家作者説の仮説

辛島正雄

中村本『夜寝覚物語』の創作

・改作についての覚え書き

坂本信道

高野蘭亭伝攷（下）

壇一雄『此家の性格』論

高橋昌彦

萩市見島の方言アクセント考

・二拍名詞第五類の性格について

長野秀樹

萩市見島のアクセント

紹介

添田建治郎

春日和男編『春日政治著作集』

重松泰雄編『原景と写像』近代日本文学論攷

二階堂整

奥村三雄編『平家正節語彙索引・節八カセ付語彙集成』

奥村三雄編『平家正節語彙索引・節八カセ付語彙集成』

浜田義一郎・中野三敏・日野龍夫・揖斐高編『大田南畝全集』

添田建治郎

第六十二号（昭和六十一年十二月）

紫式部は鷹司殿倫子の女房であったか

九州紀行小考

久保田啓一

『新著聞集』の成立

『犬著聞集』、『続著聞集』との関連から

徳満澄雄

『打聞集』と九州大学萩野文庫蔵『今昔物語抄』

・仮名書き説話集を媒介とする

板坂耀子

田中葉子

木部暢子

『大般若波羅蜜多經』読誦音について

・資料の解釈と読誦音の変遷・

日中両国語におけるアスペクトの比較対照

「いとど」と「いよいよ」について

紹介

奥村三雄著『波多野流平曲譜本の研究』

大内初夫・若木太一著『俳諧の奉行向井去来』

山

第六十三号 (昭和六十二年六月)

『狭衣物語』の成立時期

中原中也「タダ」の方法

・「春の日の夕暮」冒頭の解説・

近世唐音の重要性

『紐鏡』再考

紹介

森山隆著『上代国語の研究・音韻と表記の諸問題』

今井源衛著『王朝末期物語論』

瀬里広明著『露伴と道元』

第六十四号 (昭和六十二年十二月)

中世源氏物語享受史の一面

・源中最秘抄』を中心に・

第六十五号 (昭和六十三年六月)

『夜の寢覚』の予言と構想・天人予言の達成・

『江吏部集』に見られる言語遊戯的表現について

重盛像の変遷

『伊勢物語抒海』の位置・段の大意を中心として・

韓国漢字音の重層性

・日本漢字音との比較対照を中心に・

江口泰生

鄭兆宏

山下和弘

迫野虔徳

井上敏幸

板坂耀子

後藤康文

松下博文

岡島昭浩

赤峯裕子

崎村弘文

辛島正雄

松本常彦

田坂憲二

『和の寝覚』の予言と構想・天人予言の達成・

『江吏部集』に見られる言語遊戯的表現について

重盛像の変遷

『伊勢物語抒海』の位置・段の大意を中心として・

韓国漢字音の重層性

・日本漢字音との比較対照を中心に・

坂本信道

木戸裕子

板坂耀子

入口敦志

蔡京希

石田忠彦

内山弘

山下和弘

井上洋子

『和独対訳辞林』に於ける見出し・同義語表示部の検討

『和英語林集成』を交えて・

『蜻蛉日記』66・67・68・70番歌の解釈・後藤康文

石田忠彦氏の(紹介)『依田学海 墨水別墅雜録』を読む

今井源衛

平安朝漢文学研究会編『平安朝漢文学総合索引』今西祐一郎

中野三敏著『江戸名物評判記案内』・中野三敏編『江戸名物評判記

集成』

宮崎修多

板坂耀子編『江戸温泉紀行』

横山正著『近世演劇攷』

福井迪子著『一条朝文壇の研究』

今井源衛著『源氏物語の思念』

田尻龍正著『芭蕉論集』

五所美子著『歌人上田秋成』

田坂憲二・田坂順子編著『藤原義孝集 本文・索引と研究』

福井迪子

久保田 啓一

橘 英哲

工藤 重矩

田坂 憲二

白石 悌三

飯倉 洋一

福井 迪子

「タリ」と「テアリ」

『和独対訳辞林』注記部に関する検討

・和英語林集成との異同状況から

韓・日両国漢字音の対比研究

・日本語教育のために

対立する他動詞をもつ自動詞の使役構文

清原宣賢自筆『日本書紀抄』所収『日本書紀』神代卷傍訓の声点

内山 弘

平家物語の人物像とその変遷

・待遇表現・語りの曲節を中心に

奥村 和子

第六十八号(平成元年十二月)

『和泉式部日記』成立の背景

もうひとりの薫・『狭衣物語』試論

『伊勢物語秘訣抄』について・延宝期の古典享受・田中葉子

義太夫節浄瑠璃本における山本版に対する他版の抵抗

横山 正

坂本 信道

後藤 康文

田中 葉子

横山 正

第六十九号(平成二年六月)

一夫一妻制としての平安文学・補説

・近年の婚姻研究の紹介をかねて

平安詩序の形式・自謙句の確立を中心として

後鳥羽院の『狭衣物語』受容

『支子文庫本勅撰和歌集抄出注』について

山田 洋嗣

工藤 重矩

木戸 裕子

後藤 康文

久保田 啓一

橘 英哲

工藤 重矩

田坂 憲二

白石 悌三

飯倉 洋一

福井 迪子

第六十六・六十七号(奥村三雄教授退官記念号・平成元年六月)

奥村三雄教授略歴

奥村三雄教授主要著作目録

佚存平安朝詩注

『西鶴名残の友』管見

藤原齊信の人間像・『小右記』を中心に

平安朝における官職唐名の文学的側面

知盛の位置

靈異記の成立事情

源氏物語の和歌・露・霧・雲の心象

「風博士」解説 あるいは蛸博士の奸計

『浅茅が露』作者考・藤原為家作者説の可能性

格助詞「を」による動詞分類

小野蘭山自筆稿本『伊呂波別動植物名彙』について

・方言資料としての価値

二階堂 整

『青猫』の形成・大手拓次との関係を軸として、
一八世紀初頭の薩隅方言における「ノ」と「ガ」の用法

江口 泰生

第七十号 (平成二年十二月)

『竹斎』考

入口 敦志

二月の子の日考

福田 智子

・能宣集』諸本の詞書をめぐって、
近世上方語における接続助詞ケレドモの発達

坂口 至

鹿児島および東北方言の語中力行タ行の子音について

木部 暢子

第七十一号 (平成三年六月)

古文書における「る・らる(被)」の特色

辛島 美絵

前田流平曲史の変遷

奥村 和子

幼き日のかねごと

・伊勢物語』第二十三段・「くらへこじ」の解釈、

後藤 康文

「俵や姥ひとりなく月の友」注解

・『更級紀行』の諸問題(下)、

井上 敏幸

黄表紙作者小考

・恋川春町・芝全交・万象亭に関する覚え書き、

園田 豊

「夢十夜」の時間・試論

中原 豊

第七十二号 (平成三年十二月)

時平像の形成

南里 みち子

天平二年筑紫梅花の宴

・『万葉集』巻第五・八二五〜八四六番歌の構造、

後藤 康文

桜姫の純情と貞節

・鶴屋南北作『桜姫東文章』より、

小林英雄と太宰治・ジイド受容をめぐる接点、

現代語複合動詞の構造について

・動詞の自他を通して、

重刊本「捷解新語」の巻のグル・プ化

・「ガ行音の表記法」「御(おん)」「儀」などの現れ方から、

趙 南徳

第七十三号 (平成四年六月)

『平家物語』の作者像について

・現存本の内容を材料にして、

栗田障子詩考

九州方言の分類と位置

・日本語地図図を利用して、

入声とアクセント変化

琉球の古典籍三題・本土文献の引用と変容、

梅崎 順一
梅崎 光
崎村 弘文

九州大学蔵『知顕集』について

藤島 綾

第七十四号（平成四年十二月）

詩集『思ひ出』の成立

國生 雅子

再読字から見た日本書紀の訓法

内山 弘

・ 神代巻を中心として

口バート キャンベル

中村仏庵の文事（二）・職人家歴の辞藻

第七十五号（平成五年六月）

「不十分終止」の史的展開

京 健治

・ 旧終止形残存の文法史的意義

播磨 桂子

東三条院詮子四十賀屏風歌と藤原公任

・ 屏風歌詠作史瞥見

福田 智子

九州大学松濤文庫蔵『熊野の本地』について

『思はぬ方にとまりする少将』と『ころところ』

岩松 博史
後藤 康文

第七十六号（平成五年十二月）

瑞香の詩歌

沖縄方言論争再考

今井 源衛
花田 俊典

九州大学文学部蔵『つれつれ艸口義』

・ 談義本時代の講釈聞書

川平 敏文

賀茂季鷹の『狂詠』云禁集』

・ 翻印と解題

盛田 帝子

第七十七号（平成六年六月）

「大原の山」から「大原の里」へ

「古老」小考

福田 智子

・ 平安朝和歌における「山」と「里」

・ 今昔物語集』巻四第九話を中心に

岩松 博史

・ 宗因佐賀来遊時の一資料

関澤 智子

・ 沖縄から東京へ・山之口貌再上京考（上）

松下 博文

近代漢語の一側面

・ 『漢語英訳辞典』に見られる二字漢語のサ変動詞用法をめぐって

坂本 浩一

第七十八号（平成六年十二月）

『捷解新語』の改修

・ 原因・理由表現を中心として

申 忠均

『うた』の力・今様の徳を語る逸話を巡って

大木 桃子

『休聞抄』と『花鳥余情』

・ 九州大学附属図書館蔵『花鳥余情』を資料にして

波多野 真理子

金剛寺蔵『和漢朗詠集』（零冊）をめぐって

後藤 昭雄

第七十九号（平成七年六月）

ニテアリ 語法の表現性をめぐって

色葉字類抄の声点小考

南里 一郎

ヤマトと沖縄のはざままで・山之口貌と沖縄（二）

梅崎 光
松下 博文

中世室町期における四段動詞の下二段派生

青木博史

第八十号 (平成七年十二月)

一条兼良の『河海抄』注記批判(一)

青木博史

廊をめぐる景色・『源氏物語』の一表現方法・
「願立」説話展開の再検討

波多野 真理子

橋口 晋作

立羽不角論序説・貞門の俳諧師としての不角・
富小路貞直宛加藤千陰書簡

平島 順子

平島 順子

「狂言記」における命令形語尾の脱落

盛田 帝子

荻野 千砂子

第八十一号 (平成八年六月)

宮川一翠子寛え書・和漢の位相・
元禄・享保期の徒然草注釈

兼好発憤説と述志の文学・
「僧」と「法師」の間

勝 又 基

川 平 敏 文

『伊勢物語』第五十段末尾本文考

岩 松 博 史

後 藤 康 文

可能動詞の成立について

青 木 博 史

第八十二号 (平成八年十二月)

九州大学附属図書館蔵『紫明抄抜書』について

田 坂 憲 二

平祐拳寛え書き・一条朝受領歌人の面影・
人見竹洞と東臯心越・竹洞伝の一詢・
「神神の微笑」の主題と方法

福 田 智 子

ハ・ン、フロー・ベル作品とのかかわりから

大 庭 卓 也

米沢本倭玉篇の字音の拗音表記

井 上 洋 子

朝鮮資料における条件表現の一特性

梅 崎 光

第八十三号 (平成九年六月)

朝鮮資料における条件表現の一特性

申 忠 均

『御所本和漢兼作集』の構成について

申 忠 均

『和漢朗詠集』・堀河百首』との比較を中心として

木 戸 裕 子

三条西家流『伊勢物語』注釈の一形態

藤 島 綾

支子文庫本をめぐって

藤 島 綾

一九洒落本に於いての滑稽

藤 島 綾

京伝との比較を通して

康 志 賢

第八十四号 (平成九年十二月)

坂口安吾『吹雪物語(夢と知性)』論

佛 石 欣 弘

バンジャマン・コンスタンの「アドルフ」との関連から

佛 石 欣 弘

芥川龍之介『おぎん』の位置

井 上 洋 子

「薄雲女院」に見る源氏物語注釈
仮定条件句形式出自の助詞について

波多野 真理子

・デモ・ナリトモの意味機能変化・
人物 を受ける「へ」について

矢毛 達之
黒星 淑子

第八十五号 (平成十年六月)

母の祈り・枝折型姥捨伝説の歌に関する一考察・
『闕疑抄初冠』考

大木 桃子
藤島 綾

一九の創作姿勢に関する一考察

・享和期の読本と黄表紙を題材として・
『文学書官話』の成立及び日本への流布

不定語イカデの疑問用法をめぐって

九州方言の動詞の活用

康 志賢
舒 志田
越 智隆伸
迫野 虔徳

第八十六・八十七号 (中野三敏教授退官記念号・平成十一年六月)

中野三敏教授略歴

中野三敏教授著作目録

『おくのほそ道』私注

・『そらる神の物につきて心をくるはせ』の意味・井上敏幸
遊女評判記の世界

・『色道大鏡』と延宝版『長崎土産』・
『天石笛之記』が描く平田篤胤

近代短歌研究叢話

・拙稿「別離再読序説」にこだわる・

若木 太一
板坂 耀子
白石 良夫

「あを本」の青の色々

園田 豊

老曾の森の物語・「目ひとつの神」私見・
すみだ郷土文化資料館蔵『清暉園図記』解題と翻印

飯倉 洋一

・中村仏庵の文事・その四・
「鳩巢小説」の変化と諸本

・近世写本研究のために
「整はず候」歌と「聞えず候」歌

口ハート キャンベル
宮崎 修多

・冷泉為村の批語と褒詞(一)

松下筑陰伝攷(上)

『怪醜夜光魂』の成立について

評判するということ

賀茂季鷹の生いたちと諸大夫時代

一九洒落本における類型的人物像について

記念館本『園太暦』追考

久保田 啓一
高橋 昌彦
榎澤 葉子
入口 敦志
盛田 帝子
康 志賢

・芭蕉書写本としての可能性・
『洞房語園』の諸本

『樽桑名賢文集』の書入れ

・荻生徂徠の元禄名賢月旦・
漢語資料としての詩学書

・『詩語碎金』を例として・

第八十八号 (平成十一年十二月)

直養と春海・縣門江戸派の系譜・
「あかす」恋・『伊勢物語』二段考・

川平 敏文
勝又 基
大庭 卓也
岡島 昭浩

直養と春海・縣門江戸派の系譜・

「あかす」恋・『伊勢物語』二段考・

亀井 森
川原田 祐子

軒端の鶯・『蜻蛉日記』の「のたちからし」について 今西祐一郎
中世前期における「文相当句+ナレバ・ナレド(モ)」形式 矢毛達之

「御々様」表現の史的考察

・「ねぎらい」表現の変遷から、 宅間弘太郎

第八十九号 (平成十二年六月)

仮名文書の形容詞

・特色ある形容詞語彙について(その二) 辛島美絵
「いとわるき人なり」考・『枕草子』の本文批判・後藤康文

『山路の露』の文学史的 위치 について 湯川直美

『智恵鑑』 修訂考 勝又基

天理図書館蔵『狂言六義』の原因・理由を表す条件句

・ホドニとニヨツテを中心に、 松尾弘徳

第九十号 (平成十二年十二月)

浅香久敬・元禄加賀藩士の前半生、

王澤不渴鈔作者考

・文鏡秘府論との関聯をめぐって、 大石有克

九州大学蔵『島田家資料』目録考

・諸家自筆詩文箋の部、 大庭卓也

「資料」という語について

「運用形+コト」構文小考・衰退理由をめぐって、京 健治

第九十一号 (平成十三年六月)

「いはせの森の呼子鳥」考

・源氏物語「早蕨巻の引歌」

「衛門督のさしつぎよ」考

・源氏物語「紅梅巻の一文」 今西祐一郎

浅香久敬・元禄加賀藩士の後半生、

明治期日本語訳聖書における訳語「悪魔」について 尊田佐紀子

連声表記から見た天理図書館蔵『狂言六義』

・詞章筆録者複数説との関連、 松尾弘徳

第九十二号 (平成十三年十二月)

菩提山考

『源氏物語湖月抄』所引「細流抄」に関する一考察

戯作者大極堂有長に就いての考察

熊本市の二型アクセント

待遇表現からみた「版本狂言記」の位置づけ

上野洋三
三浦尚子
田邊菜穂子
坂口至
荻野千砂子

第九十三号 (平成十四年六月)

大東急記念文庫蔵『月瀬紀行』についての一考察

・大隈言道「今橋集」との関連において、 進藤康子

福岡藩儒竹田春庵と朝鮮通信使

同時代の風景・源氏物語「うつろひ」考、 田村隆

「お…する」表現をめぐって

・その成立と規範的用法について、 宅間弘太郎

ニテアラムからデアロウへ

前田 桂子

第九十四号 (平成十四年十二月)

指示詞におけるコソアド体系の整備

迫野 虔徳

「空海真筆いろは」、規範性の終焉から現行平仮名字体の成立まで

山内 真紀

フェレイラ、そして沢野忠庵

下野 孝文

・「沈黙」論の前提として(一)・

川原田 祐子

・「蜻蛉日記」天禄三年二月の記事・

今西 祐一郎

・「とりつくるひかゝはる」考

・「蜻蛉日記」本文批判・

第九十五号 (平成十五年六月)

「用なさにとゞめつ」考・紫式部日記の贈答歌・ 田村 隆

『平家物語』当道系諸本、その他の諸本の詞章(記事)と琵琶語りなど

・琵琶に関連する記事から、 橋口 晋作

十返舎一九の「忠臣蔵もの」黄表紙展開史攷 康 志賢

キャラ、そして岡本三右衛門

・「沈黙」論の前提として(二)・ 下野 孝文

指示詞から人称詞へ、「ナタ」系語の変遷、 荻野 千砂子

「狂言台本における二重否定の当為表現

・大感流虎明本・版本狂言記を中心に、 松尾 弘徳

第九十六号 (平成十五年十二月)

吉田桃樹「樂游余録」について

戦後文学と 私刑

・思想課題としての「規範的自由」・

不定詞「ドウ」の発達

否定過去の助動詞「なんだ」に関する一考察

京 健治

第九十七号 (平成十六年六月)

世阿弥能楽論における態と心

・花の成立の意味と構造を巡って・

夕顔以前の省筆

指示詞「カノ」「アノ」について

肥筑方言におけるサ詠嘆法

外来語の複合語における略語の語構成

林 慧君

第九十八号 (平成十六年十二月)

『無名草子』と「長春花」

「思ひやるべし」考・源氏物語以後の省筆・

田村 裕子

小津久足「陸奥日記」について 菱岡 憲司

お礼のことは「ありがたい」について 荻野 千砂子

第九十九号 (平成十七年六月)

『おもろさうし』のラ行四段動詞「おわる」の成立

遊女の血縁・往生譚と今様 迫野 虔徳

大木 桃子

板坂 耀子

山崎 正純

荻野 千砂子

岩倉 さやか

田村 隆

熊谷 政人

坂田 佳江

林 慧君

宮崎 裕子

田村 隆

菱岡 憲司

荻野 千砂子

迫野 虔徳

大木 桃子

象徴詞を動詞化する形式の変遷
人名の語構造

川瀬卓
田籠博

第百・百一号 (迫野虔徳教授退任記念号・平成十八年六月)

迫野虔徳教授略歴

迫野虔徳教授著作目録

中古仮名文における漢文訓読語「ことし」の意味用法について

森脇茂秀

中世後期における「コソアレ」形式

矢毛達之

「おなじぬれ」・「いとぎなき手」補考

今西祐一郎

「女三の宮の幼さ」について

・若菜上巻の読みの試み・

伊佐山潤子

左馬頭の指・『源氏物語』帚木巻の別れ話の裏側・坂本信道

村雨の軒端・『去来抄』と『源氏物語』・田村隆

「頭中將の御小舎人童」考その他

後藤康文

・堤中納言物語の本文批判・

中世王朝物語における「不義の子」の処遇

宮崎裕子

・在明の別れを手掛かりとして・

「ささやき竹」考・西光坊とその周辺・

安川多映

「正しい言葉」と「きたない言葉」

・川村湊氏「黄表紙王国の崩壊」(『近世狂言綺言列伝』所収を一読して・

園田豊

唱歌と童謡・新たな童謡史のために・

國生雅子

江藤淳と 転向 論の帰趨

山崎正純

沖繩戦と きれいな標準語

・目取真俊「水滴」への視角・

松下博文

談話資料からみた福岡方言のアスペクトの実態

二階堂 整

『隣語大方』の諸本間関係再考

申 忠均

句接辞「ーがち」の史的展開

内 富 純 江

象徴詞の「と」脱落についての通時的考察

川 瀬 卓

音節構造と字余り論

高 山 倫 明

総目次

〒八二一八五八一 福岡市東区箱崎六一一九一
九州大学文学部内九州大学国語国文学会
(Tel・Fax:〇九二一六四二一三三九五)

ホームページアドレス
<http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/japano/>
(研究室のアドレスも記していますので、学会関係・住所変更等の各種連絡にも御利用下さい。)